

三鏡（出口王仁三郎）

本の概要

【月鏡・水鏡・玉鏡を一冊に収録！ 分類・索引付の決定版！】

●激動の20世紀を光の如く駆け抜けた宗教家・芸術家Ⅱ
出口王仁三郎。時に熱く、時にユーモアを交えながら混乱する現代日本に喝を入れる。

●巻末には、恋愛や人間関係の虚飾にまどわされない真の幸福の追求を説く「徒然のままに」をはじめ、「海月くらげと鮫鰈あんこう」「俳道」「茶道」「美人」「吾蠅」などユーモラスな中に人生の機微をつく王仁三郎ならではのエッセイを追加収録。

目次

【第一章 神々の由来と活動】

●神について

神様と温室 22 神様と花 22 神様のお仕事は二つ玉

22 科学の力 22 神の経綸 23 犠牲 25 広大無辺の

御神徳 26 神という言葉 27 神様と味わい 27 元の

生き神 27 神様と標準 28

●良の金神と坤の金神

良の金神様 28 大神様方の御容姿 29 神功皇后様と現

われる 29 三千年に実る桃 29 良坤二神の御歌 30

三段の型 31

●神素盞鳴大神

牛頭天王と午頭天王 32 素盞鳴尊と鼻 32 二大祖神

32 鼻の世の中 33 八十平甕 33 琴の初め 33 素尊

と稚姫岐美命 34 素尊の神業 35 アジア大陸と素尊の

御職掌 35 蓑笠の起原 36

●ミロク神

六百六十六の獣 37 ミロク、ミロク 37 五十六億七千

万年 38 ミロク三会 38 王ミロク様 40 阿弥陀の実

現化、弥勒仏 41

●瑞霊と巖霊

火の洗礼と水の洗礼 42 我はキリストの再来にあらず

42 巖と瑞 43 稚姫岐美命の御神体 45 神の籍に入ら

ざるもの 45 月欲しい 46 学と神力の力競べ 46 北

山の火竜 46 キリストの再来 47 三十六相と八十八種

好 48 大乘と小乗 48 変性男子、変性女子 48 無間

の鐘 49 初対面 50

●諸神

竜宮の乙姫様 51 竜神の御職務 51 大黒主と八岐大蛇

51 アテナの神 51 龍は耳が聞こえぬ 52 天狗 52

天津神と国津神 52 道の長千羽の神 53 五男三女神の

働き 53 盤古について 54 廻り金神 54 八岐大蛇 54

武の神 55 男女の道 56 蛭子の神 56 稲羽の白兔

57 日本武尊 58 国生み神生みの神業 58 七福神 60

●宇宙の神秘

地平説について 62 月は母体 62 太陽の黒点 63 大宇宙 64 神示の宇宙 65

●言霊

言霊と言語 66 若返りと言霊 66 年を若くすること

66 言霊奏上について 67 音頭と言霊 67 新年勅題について 70 宇宙の声音 71 声の順序 72 ヨハネ伝 72

74 隻手の声 73 宇宙の声 73 言霊学 73 仮名づかい

74 ア行とヤ行 74 天津祝詞と五大父音 74

●立替え立直しとミロクの世

世の終末と立替え 75 ミロクの世 75 ミロクの世と物質文明 76 世は持ち切りにさせぬ 76 聖賢ではできぬ

76 修理固成の仕事 77 世の大峠と信仰 78 水も漏らさぬ経綸 79 小三災 81 出産率と救い 82 現われかけたミロク様 82 審判は近づいた 82 新つの世 83

【第二章 霊界と靈魂の真実】

●霊界の諸相

天と地 86 天人の五官 86 霊界での話 87 人間は木から生まれた 87 模型を歩む 87 天帯 89 霊界の親

90 霊界の宣伝使 90 天人と愔気 90 一日の修行 90

90 宣伝使の階級 91 人間の創造 91 霊の姿 92 雑念

の盛んなる人 92

●靈魂

裁、制、断、割 93 人間の靈魂 93 人間は種々の前世

をもつ 93 守護神 93 精霊の生命 94 霊と精霊 94

身魂の三種 94 霊衣のこと 95 人間と動物 96 誕生

の種々 96 輪廻転生 96 人魂 98 霊肉脱離 98 魂の

入れ替え 99 心と魂 99 他神の守護 99 進化論 100

人魂 100 直美と操 100 再生 101 寝顔と性質 101

●兇党界と悪霊

大江山と邪気線 102 高姫と妖幻坊 102 兇党界 103 悪

魔の神業妨害 103 悪魔の世界 104 心霊現象と兇党界

106 筑波山の悪霊 106 三りんぼう 106 光る宝石と曲津

●霊の作用

107 兇党界と人間 108 病氣と脈搏 109 女と蛇と馬 109 霊と食物 109 墓場跡

と飲食店 110 山上の家 110 家を建つる場所 111 人神

111 霊媒 111 爪をきる時 112 霊媒は短命 112 神がか

り 112 日本と外国の神がかり 113 他家の鼠 113 ナヒ

モフ号の金塊 113

●靈力と靈驗

平安石と眼病 114 正夢と靈夢、靈眼 115 虻になつて

116 天眼通について 117 靈眼 118

●聖地

天国、靈国と花壇 120 地上に移写するオリオン星座 120

本宮山は平重盛の居城 121 天恩郷の命名 121 月照観

音と平安観音 121 亀岡と三五教 122 日本と何鹿郡、綾

部町 122 開祖様の奥津城 122 月宮殿の宝座 123 大安
 石と小安石 126 高熊山に現われた靈石 127 島根県 130
 信濃国皆神山 130 墓目の法 132 素尊御陵 134 熊山
 にお供して 135 噴火口と蓮華台 140 ふたたび素尊御陵
 について 140 マリヤ観音 141 月宮殿の仁王様 141 神
 庭会議 142 天書 142 ふたたび七夕祭について 144 瑞
 穂神靈 144 黄金閣の瓢箪 145 憑依靈と聖地 145 瑞

【第三章 瑞靈の教えと人生】

●愛について
 恋愛と恋と愛 148 絶対善と絶対悪 149 恋愛と家庭 149
 愛の独占 149 愛の力 150 怒りと毒素 150 愛の分霊
 151 神への恋愛 151 惚れられる人 152 妻としては 153
 猛獣と愛 153

●信仰と人生
 無抵抗主義と抵抗主義 154 神命と実行 155 三猿主義は
 徳川氏の消極政策 155 物忘れと無我の境地 156 悲劇と
 喜劇 156 三千年に一度実る桃の実 157 どんな仕事にも
 靈をこめる 157 万有と道 157 老人と若人 158 天は人
 に二物を与えず 158 神的順序と事務的順序(人的順序)
 159 人生の諸問題 160 断食のこと 162 神の恵は公平
 無私である 163 世の中に最も不幸なるもの 165 苦集滅
 道 166 無我の境、無我の声 168 惟神の心性 168 生命
 171 人生と信仰 173 死に直面しての安心立命 174 神と

俱にある人 175 四苦 176 謝恩と犠牲心 176 偽善者 177
 懺悔 177 信仰に苔が生えた 178 堪忍 178 人間と現
 世 179 意志想念のままなる天地 180 神と俱にある人
 181 夏 184 惟神の心 184 至誠と徹底 184 人間という
 問題 186 命令をきく木石 188 有難き現界 189 三摩地
 189 胆力養成家 190 大本格言 191 打算から 191 仏典
 について 191 日月模様の浴衣 192 因縁の土地 192 安
 心立命 194 明従せよ 194 信じること 194 取違いの
 信仰 195 個性 195 無我の境 196 身魂磨き 196 大本は
 型の出る所 197 法三章 198 空気のぬけた頭 198 死獅
 子と生鼠 198 わが子の死 199 皇道と王道 200 全身の
 奉仕 200

●知恵と教訓
 心と形 201 玉について 201 人を使うこと 204 人は度
 胸 204 包容力 204 霊体不二 205 惟神 205 太陽を招び
 返した清盛 205 見直し聞き直しと嗅ぎ直し 206 宿命と
 運命 206 結婚と男女の年齢 207 魂は外へ出さねばなら
 ぬ 207 忍耐 207 変わったものに相手になるな 208 私
 憤と公憤 208 親切にしてやれ 208 運は人が作る 209
 因果応報 209 断の一字 209 大事業 210 やり通せばよ
 い 210 金持ちと金番 210 霊止と人間 211 三菩薩 211
 魂の大いさ 211 安全な代物 211 過去の失敗 213 謝恩
 の生活 214 捨てることは正しくつかむこと 216 忘れる
 ということ 216 日本人の抱擁性 217 上になりたい人

219 善言美詞は対者による 219 空相と実相 219 当相即
220 つまづく石 220 心配事 221 棺も旛も 221 学問
も必要 221 理智と感情 222 迷信 223 崇り 223 天職と
職業 224 数字の頭 224 不断の用意 225 教育について
225 放任主義の教育について 226 勇往邁進 226 強がる
人 227 老人を友達に 227 遠大なる準備 228

●筆先
神様の一年 229 国栖を集めよ 229 梅で開いて松でおさ
める 229 神諭の九分九厘 230 「いざゞく」と「いたゞ
く」 230 差添えの種 230 開祖様のお歌 231 梅で開い
て 231 改神慢神 231 国家的思想 232

●道院
壇訓（扶乩）について 233 道院奉唱呪文略解 235 良の
金神様と支那 236

●霊界物語
霊界物語は最後の審判書なり 237 霊界と神霊界 238 論
語読みの論語知らず 238 スパール姫、スダルマン太子
239 泣く病人は死ぬ 239 舍身活躍 239 エルバンド式と
モールバンド式 239 三日で読め 240 秘密 240 吳の海
240 淋しいということ 241 五百津御統丸の珠 242 聖壇
242 物語拝読について 244 探湯の釜 244 太平柿の歌
245 たまがえしの二、三種 247 「ム」大陸は黄泉島 248

●祭祀
ハルナ 248 出雲言葉 248

祈りは天帝にのみ 250 拍手の意義 250 三杓子は天国
250 御手代と国替え 251 追善供養 251 天津祝詞と神言
251 墓の台石 252 皇霊祭と祖霊大祭 252 死者の枕す
る方向 252 御神霊を鎮める時 252 惟神真道弥大出口
国直日主之命 253 大神様御奉斎について 253 半僧坊様
254 お給仕について 255 ミロクの礼拝 255 同殿同床
の儀 256 フルベユラ 256 御玉串について 256 生松 257
祝詞奏上 257 守護神 257 拍手 258 神饌物 258 惟神
霊幸倍坐世 258 祖先の命日と死 259 玉串 259 神饌に
ついて 260

●宣教
道楽は一つの宗教である 260 仏と神 261 宣伝の標準
261 甲子章について 261 無二の真理教 262 現代の日本
人 262 短い言語 263 最後の真理 263 准宣伝使 264 熱
するということ 264 成功したる講演 264 宣伝使帽 265
266 師匠を杖につくな 265 宣信徒よ 265 愛善紙百万部

●宗教
神、耶、仏、すべてを信ず 268 易の当否 268 真の宗教
268 信教の自由 270 宗教団とその教祖 270 大本とい
う文字 271 黄教、紅教 272 易 272 大乘教と小乗教
あ、既成宗教 273 宗教心 275 大本人の守護 275 托
鉢と巡礼 275 行 276 仏教は無神論 276

275 行 276 仏教は無神論 276

276 行 276 仏教は無神論 276

276 行 276 仏教は無神論 276

276 行 276 仏教は無神論 276

276 行 276 仏教は無神論 276

276 行 276 仏教は無神論 276

276 行 276 仏教は無神論 276

276 行 276 仏教は無神論 276

276 行 276 仏教は無神論 276

276 行 276 仏教は無神論 276

276 行 276 仏教は無神論 276

276 行 276 仏教は無神論 276

276 行 276 仏教は無神論 276

【第四章 王仁三郎の美と芸術の世界】

●美と芸術の世界

- 和歌と調べ 278 風も浪も七五三 278 黒は色の王 279
- 冠句は大衆文芸 279 字と筆 279 芸術は宗教の親 280
- 聚楽の第 280 絵を描く時 280 名歌、名文章 282 書画
- をかく秘訣 282 神の作品 282 無作の詩 283 浄瑠璃 283
- 285 宗教より芸術へ 284 自然に描ける絵 284 絵について
- 285 宗教即芸術 287 大画揮毫について 287 宗教の母
- 288 和歌について 288 襟首 288 伊勢物語と和歌 288
- 289 頭髪 289 絵と独創 289 器物の裏底 290 絵と
- 墨 290 風を描く 291 睛を入れる画法 291 血液と絵 291
- 悠々自適 291 作歌の法 292 明るいのが歌 292 礮水
- びきの絹本 293 書道 293 茶室 293 掛軸について 293
- 庭石の配置 294 歌 294 歌人 295 女は神の傑作 296 月
- 296

【第五章 素顔の王仁三郎】

●故郷と回想の王仁三郎

- 小さい蒲公英 298 焼き捨てた紙幣 298 賭場の番人 299
- 西南戦争とわたし 300 真如聖師と応拳 301 思い出の
- 一、二 302 辻説法 303 角帽の階級打破 304 何よりも
- 楽しみ 305 人に化けた狸 305 大槻鹿造と王仁 307 上
- 田家の姓 307 開祖様の御昇天 307 開祖様をおんぶする
- 308 海潮 308 敬老尊師 308 天恩郷が好きな理由 310

- 亀山城 310 玉の井 312 最初の信者 312 故郷人 313 霊
- 的小説 314

●王仁三郎、自身を語る

- 雑魚取りの名人 316 碁と将棋は嫌い 316 わたしと仕事
- 317 毒と薬 318 人に会いたくない 319 わが子の病気
- は癒りにくい 319 わたしは大人になった 319 祈りの声
- が聞こえる 320 面会のこと 320 生前に銅像を建てては
- ならぬ 322 線香は嫌い 322 三つの空手 323 四日月を
- 三日月と見る一日酔 323 わたしは眼が悪い 323 子供に
- なって寝る 324 霊的神業 324 身魂の因縁 325 碁盤を
- 買った 325 百年の生命 327 年をほかした 327 天地へ
- の義務で生きている 327 お友達がほしい 328 自己暴露
- 328 外国人の祈り声 329 面会者はつらい 329 巡笏と
- プログラム 330 面会 330 祝詞は一人で 331 写真も一
- 人で 331 獅子を御する文珠 331

【第六章 瑞言霊説】

●歴史・人物・逸話

- 千の利休は明智光秀 334 空の星と人間 336 関の地藏さ
- まと一休和尚 336 清姫のこと 336 奇魂の足らなかつた
- 南洲翁 337 歴史談片 337 釈迦と提婆 339 偉人千家尊
- 愛 342 義経と蒙古 342 隻履の達磨 343 宗祖とその死
- 344 弘法大師 344 皇円阿闍梨 344 生身天満宮 345 児
- 島高德 345 日本と孟子 346

●故事・習俗・縁起

お釈迦さんの頭 346 芋名月 346 奴という言葉 347 月
と三日月 347 ドテラの始まり 347 三都の人の心性 347
与謝の海 348 田植 348 狛犬のこと 348 みささぎ、
かささぎ 348 昔は血族結婚 349 胞衣と岩田帯 349 春
日の鹿の由来 350 河童 350 ひきとふく 350 久方の空
玉 351 系という文字 351 頭槌 石槌 351 不知火
352 350 鈿女物語 353 瓢型の墳墓 354 忍術 354 鎌鼬 355
油虫 355 火渡りの道 355 紋所 356 原始時代の貴重品
寺 357 比叡山 357 雄墓と雌墓 357 君子は豹変す
358 355 かみなが(髪長) 358 そめがみ(染紙) 358 舍利
358 358 鏡餅 359 門松 359 二本の門松 359 井戸の位置
360 360 笏 360 手の働き 360 鶏の宵鳴き 361 葛の葉の子
別れ 361 湖水 362 武家人 362 「酒」と「剣」につい
て 362 菓子と饅頭 363 仏足頂礼 363 比礼 364 弓と墓
目の法 364 左手右手 364

●女性を語る

女の型 365 仏教の女性観 366 慧春尼 368 女性の功德
370 ●礼儀・作法

●礼儀・作法

土瓶や鉄瓶の置き方 371 神社参拝の心得 371 主人の居
間 372 老年と身だしなみ 372 小さいこと 372 結び昆
布(結婚婦) 374 姓名 374 水の御恩 374 干物のあぶ
り方 374 焼肴の箸のつけ方 375 襖の開け閉め 375 床

の高さ 375 倉と便所 376 良の方角 376 上棟式と幣
食膳について 376 扇、団扇 377

●時局・世相

憂国の志士と愛国の志士 378 百年の計 378 自主的精神
1378 日本人目覚めよ 379 親作子作 380 地租委譲問題
381 不戦条約 381 細矛千足の国 381 軍備撤廃問題 382
381 軍縮問題 382 刑法改正問題 383 支那という国 383
エト読込みの歌 384 ガンジー 384 食糧問題 384 経済
と会計 385 瓢と水の藻 385 波 386 泥金の日本人 386 飛
武器を持たぬ神軍 386 愛善会の調査局について 387
行機 387 紙雛さまと兜 387 満州と宣統帝 388 天国と
現代 388 正直者日本人 389 金銀為本の政策 389 不退
転 390 非常時の人物 390 細心豪胆 390

●雑話

惟神の寝方 391 取越日記 391 日本人と悲劇 391 社会
学の距離説 392 嘘談家協会 392 三子の命名 393 美し
い人 393 無題(俚謡) 393 哺乳と変態性慾 394 393 日本
人種 394 十か月曆 394 シオン運動とモーゼの裏十戒 398
396 三大民族 396 三種の神器 397 「君」の意味 398
皇道と王道の区別 398 公卿と熊襲 398

【第七章 天然現象】

●天然現象と気候

満月と万有 400 地震と鉱物 400 日本には金は幾何でも

ある 400 金剛石 401 八月のいら蒸し 401 地震の前兆
 401 一星霜 401 ラジオは気候を調節する 402 雪の予告
 402 海岸線と山岳 403 不毛の地 403 樹木や石は天気
 を知る 404 再び日本刀について 404 日本は世界の胞胎
 404 近年の暖かさ 406 気温と風の吹きかた 406 気温
 の調節 407 亀ノ瀬の地質 408 天産自給 408 春秋の気
 候について 408
 ● 人体について
 頭髮と人間の使命 409 人相とその性質 409 出産日と男
 女 411 盲腸は人体の根の国 411 日本人の肉体 411 白
 血球と赤血球 412 細胞 413 人の面貌 413 四十八の夜
 中 413 人体と水 414 人の体は小宇宙 414 生命と歯 414
 細胞と毛孔 414 歯 415 高い鼻 415 霊と血 415 血
 ● 植物と農事
 樹木の心を汲め 416 草花より生ずる虫 417 霊木 418
 男松と女松 418 気候による植物の植え方 419 背に腹は
 かえられぬ 419 榎 419 植物と精霊 419 植えかえた木
 のため 420 神木 銀杏 420 樹木のいろいろ 420 南天と
 蓮 421 雑草は彼岸に刈れ 421 花はみな太陽にしたがっ
 て廻る 421 松と雑木 422 紅葉に楓 422 樹木の育て方
 423 梅花とその実 423 茄子 423 ふたたび花咲かぬ枝
 424 竹と豌豆 424 竹と蕎麦 424 糸瓜と白水 424 筍と
 424 竹と筍 424 米の三度作 425 命ぜられて咲いた

桜 426 香具の果実 426 松茸 426 朝顔 426 空中肥料
 426 ならずな七草 427 宅地と植樹 427 山椒の樹 427 樹
 428 榎の木について 428 梅と桜 428 竹藪と悪魔 428 樹
 温室をやめた理由 429 植木と主人 429 紅葉と歌 429 428
 ● 動物
 尸解 430 動物の寿命 430 蕨蚊 431 雀の領分地 431 水
 鳥の温度 431 虫の触角と鳴き声 432 家畜と人間の唾液
 432 動物愛護について 433 時を告ぐる鶏 433 猫は家
 につく 433 猛犬シーゴ 434 烏 434 魚を釣る時 434
 猫は魔の王 434
 【第八章 健康と民間療法】
 ● 食べ物
 耐寒力と飲酒、肉食 436 食用動物 436 米 436 玄米食
 437 水と火を食う 437 米の意味 437 味のよい所 437
 肉食の害 438 智、仁、勇の食物 438 437 キのつく動物 438
 食物 438 酒の起源 439 食物 439 食物と性格 439
 ● 健康と病気
 神示の若返り法 440 深呼吸の害 441 葱と呼吸器病 441
 脚気の妙薬 442 癩癩 442 熱と病気 442 カタバミの
 葉 442 創をした時 443 感冒の妙薬 443 病気の手当二、
 三 443 瘤を取る法 443 寝る時の形 443 443 伝染病根治法
 444 火傷の妙薬 444 柿は毒消し 444 大蛇と毒気 445
 白髪を増えぬ法 445 痔疾の妙薬 445 呼吸について 446

| | | | | | |
|--------|-----|---------|-----|----------|-----|
| 喘息全治の法 | 474 | 血の道 | 474 | 梅干の効用 | 474 |
| 摩 | 472 | 生命は同年 | 473 | 流行性感冒 | 473 |
| 産後のために | 471 | 薬二、三種 | 472 | 肺炎の妙薬 | 472 |
| 妙薬 | 470 | お土 | 471 | 旅行と入湯、食事 | 471 |
| 虫駆除法 | 470 | 中耳炎の妙薬 | 470 | 妊娠と授乳 | 470 |
| 全治法 | 469 | 動脈硬化と食物 | 469 | 服薬について | 469 |
| の薬 | 468 | 目の薬 | 468 | 香茸と胃腸病 | 469 |
| の骨 | 467 | 色を白くする法 | 467 | 毒ガスと菜食 | 468 |
| 465 | 467 | 妊娠 | 465 | 信仰と病氣 | 465 |
| 464 | 464 | 早漏の療法 | 464 | 血の道 | 464 |
| 効用 | 460 | 魚の中毒 | 462 | 痔をなおす | 462 |
| り法 | 462 | 寝ると水になる | 463 | 糖尿病の薬 | 463 |
| 465 | 467 | 色を白くする法 | 467 | 毒ガスと菜食 | 468 |
| 468 | 467 | 目の薬 | 468 | 香茸と胃腸病 | 469 |
| 469 | 469 | 動脈硬化と食物 | 469 | 服薬について | 469 |
| 470 | 470 | 中耳炎の妙薬 | 470 | 妊娠と授乳 | 470 |
| 471 | 471 | お土 | 471 | 旅行と入湯、食事 | 471 |
| 472 | 472 | 生命は同年 | 473 | 流行性感冒 | 473 |
| 474 | 474 | 血の道 | 474 | 梅干の効用 | 474 |

| | |
|----------------|-----|
| 男装坊の再生 | 476 |
| 神歌 | 477 |
| 十和田湖の神秘 | 480 |
| 解説 出口和明 | 511 |
| 底本の序文・凡例 | 521 |
| 凡例 | 523 |
| 【巻末付録 王仁三郎随筆撰】 | |
| 俳道 | 526 |
| 茶道 | 528 |
| 美人 | 529 |
| 海月と鮫鱈 | 532 |
| 徒然のま | |